

標準日本口語法

國學院大學教授
松下大三郎著

著

者

緒言

一 この書は我が標準口語の正しい相を科學的に考察することを目的として書いたものである。東京語の上品なものを中核とし、稍卑俗なものにも及び、時には又方言や文語をも引合に出して、發生の由來を明にしようとした。

二 文法の記述のしかたに二種ある。内面から外面に及ぼすものと外面から内面に及ぼすものである。例へば、先づ名詞の格を分類して、然る後に主格には「が」を附け他動格には「を」を附けるといふ様なのと、先づ動辭を擧げて、然る後に「が」は主格を示し「を」は他動格を示すといふやうのとである。前者は西洋流で後者は日本流である。この書は形式的には日本流を経とし西洋流を緯としたが、實際に收める效果に於ては兩主義を織り合せて統一し得たつもりである。

三 著者は一つの小さい砦を感じてゐる。それは自分が日本口語文典の創始者であるといふ、そくいふ、子どもにのみ許されさうなあさはかな虚榮心である。明治三十二年十一月から講義録國文學界に一箇年半ばかり毎月連載した日本俗語文典は全く口語文典の嚆矢であつた。明治三十四年に至つて單行本として出版された。もとより誤も有り、體系も不備な處が有つたが、これが學界の刺戟にはなつたので、これから多數學者のそれへの口語文典が續々著れた。その後私の頭は絶えず文法を離れなかつた。しかし明治四十年に初版を出した支那人に讀ませる漢譯日本口語文典の外は口語だけの文法書を作る機會が無かつた。

四 大正十三年に標準日本文法を書いた。これは文語口語に拘らず汎く日本語の文法を述べたのであるから口語文法の單行本ではない。この頃から口語文法だけのものを書きたいといふ考は有つたのであるが、その機會を得な

かつた。それがこの標準日本口語法に由つて始めて果されたのである。この標準日本口語法は我が標準語の法則を記載するのが目的であつて、時代を超越して觀察した日本語の構成法則に関する理論などには、特に必要を感じた處の外は、餘り觸れてゐない。それらの理論は彼の標準日本文法——昭和三年改撰の分——の方に譲りたいと思ふ。

五 此の書に用ゐた假名遣の中「こう」「そう」「まう」の三つは現行の國定教科書と違ふ。私は「かう」「さう」「もう」ではないけなと思ふ。その理由は此の書の第二〇——二三頁の一讀を煩はしたいと思ふ。

昭和五年二月十一日

著 者

標準日本口語法目次

第一章 總論

第一節 言語と文法

言語の本質 聲音語と文字語 音の心象と語の心象 語の心象の客觀化 言語の定義 國語外國語は完全にはわからない 口語 文語の起原は漢文の直譯に在る 標準語 標準語は架空の語であつてはならない 東京語 標準語の二解釋 標準語の標準語 標準語は方言の覇 文語の標準語 現代語 古文と擬古文 文法と文法學 思想の情變に順應する法則 聲音學は文法學の一部ではない

第二節 說話構成の過程

說話構成の三階段 斷句 斷句は或る用向を表すもの 具體的了解 斷句を文といふのはよくない 詞 所謂る助詞助動詞は詞ではない 單詞と連詞 文章論は詞の相關論である 一詞一斷句のもの 原辭 言語の最低單位 完辭と不完辭 完辭と詞の區別 單辭と連辭 連辭の單詞

第二章 詞の種類

第一節 品詞別

従来の品詞別 詞と原辭との混同 第一期の品詞別は原辭の分類 西洋の品詞別は詞の分類 第二期の品詞別は詞と原辭との混合分類 文の成分は即ち詞でなければならぬ 品詞別の立て直し 連辭をも含む品詞別 五品詞

一六

第二節

名詞(代名詞を含む)

二一

代名詞も名詞である 連詞の名詞 無格の名詞 有格の名詞 名詞の分類 本名詞 代名詞 未定名詞 疑問と不定 實質名詞 形式名詞 形式名詞は従来の品詞別では設けない

第三節

動詞(形容詞を含む)

二五

動詞形容詞は皆動詞 單詞の動詞 連詞の動詞 單辭の動詞と連辭の動詞 獨立性の動詞 從屬性の動詞 有活用動詞 無活用動詞 動作詞と形容詞 分解されない直観 主體と作用との分解 動作は時間的 形容は超時間的 運動は時間に於ける變化 静止は時間に於ける不變化 「有り」は靜止的動作 「遠かり」「近かり」……は形容詞ではない 芳賀博士の形容動詞

第四節

副詞(接續詞を含む)

三一

副詞は他語の意義の運用へ從屬する 連用 副詞は屬性の概念を表す 副詞は敘述の力が無い 副詞の從來の定義 名詞を修飾する副詞 名詞を修飾する副詞の發見は接續詞といふ品詞を否定する 實質副詞 諸著副詞 前置詞後置詞關係詞 前置詞は客語を支配する 前置詞の誤解 前

第五節

副體詞

四四

置詞は頭助辭ではない 接續詞 接續詞は接續性の副詞である 接續詞の四種 九品詞説で設けない品詞 「或る」は動詞でもなく形容詞でもない 副體詞の語彙 動詞を修飾する副體詞 副詞と副體詞との區別 西洋の形容詞 西洋人も形容詞を誤解した

第六節

感動詞

四八

感動詞は主觀詞である 他は客觀詞(概念詞)である 感動詞の二種 實質感動詞 從句 感動詞の豊富は世界無比 民族性の發露 形式感動詞 西洋には形式感動詞が無い 「なあ」「ねえ」の意義 「なあ」と「ねえ」の別 感動の助辭 日本語の生命

第七節

變態の品詞

六〇

變態品詞の種々 名詞性動詞 名詞性副詞 名詞性副體詞 名詞性再名詞 動詞性名詞 動詞性副詞 動詞性副體詞 動詞性再動詞 副詞性名詞 副詞性動詞 副詞性副體詞 副詞性再動詞 感動詞に關するもの 複雑な變態品詞

第三章

原辭の種類

六八

原辭 原辭の分類 完辭 完辭の品詞別 椎田直助の體言用言 大概博士の體言用言 高橋龍雄氏の體言用言相言 助辭の種類 動助辭と助動詞 靜助辭と「て」を以て(助詞) 頭助辭と尾助辭

接頭辭と接尾辭 不熟辭 字音 連辭の不熟辭

第四章 活用

七五

第一節 總説

七五

活用は形式的意義の變化を伴ふ 語幹と語尾 語幹語尾の區別の不明確なもの 活用圖と活段
「ず、て、へき、こと、ば」

第二節

正格變格並にクシク活

七九

動作性の活用と形容性の活用 正格 口語の上二段活 四段活の音便 ガナベマ四行 サ行の音便
ハ行の音便 「行つて」と「行つた」變格 ナ行變格は文語及び方言 ラ行變格は口語にも有
る ク活シク活 不十分終止 「ず、て、へき、こと、ば」と「ば、て、點、こと、は」從來漏れた活用

第三節

第三活段の論 附、ラ行變格

八九

終止と連體 口語の終止は第四活段 文語活用圖の換骨脫體 終止は第三活段に限らない 直截
終止格 再指終止格 不十分終止格 口語の不十分終止格 不合理な活用圖一 ラ行變格の不十
分終止格 不合理な活用圖二 煩はしい活用名 第三活段の用法

第四節

ナ行變格の變體

九八

第五節

特別ラ行變格

一〇二

ラ行變格 特別ラ行變格 九州語

第六節

特別サ行變格

一〇六

特別サ行變格 ごさんす ます です

第七節

無名の動作性活用

一〇七

第八節

無名の形容性活用

一〇九

「こう」「そう」の假名遣 「まう」の假名遣

第九節

活用の種類の整理

一一三

四段活系と一二段活系 無名系

第十節 活用の轉換

一一六

可能性の轉換活用

一一八

被動性使動性の轉換活用

一二九

動作性の轉換活用

一二〇

第十一節 誤り易い活用	一一〇
-------------	-----

一、活用種の誤 二、行の假名遣の誤

第十二節 迂愚な活用圖	一二四
-------------	-----

活段 轉活用 所謂五段活

第十三節 五十音圖の誤解	一二七
--------------	-----

第十四節 各活段の意義	一三一
-------------	-----

第一活段未然形 第二活段中程形 所謂連用形 第三活段直載形 第四活段指定形 第五活段放任形

第五章 動助辭	一三八
---------	-----

第一節 總説	一三八
--------	-----

敘述性の有る助辭 所謂の動助詞 接尾辭 動助辭の意義上の分類 「如し」「だらう」「てせう」「たらう」 活用からの分類 接續上からの分類 助動詞の辨

第二節 使動の動助辭 附、尊稱	一四四
-----------------	-----

使動 原動と使動 自動と他動 サ行變格「爲」の使動 四段活化 尊稱

第三節 被動の動助辭	一五〇
------------	-----

被動	一五〇
----	-----

被動 被動の主體と客體 形式的被動 「せられる」と「される」

尊稱	一五五
----	-----

主體尊稱 尊稱の發生 尊稱と被動の區別

被動の詳説	一五七
-------	-----

一、利害の被動 利害被動の四種 二、單純の被動 三、可能の被動 可能の惡文 四、價値の被動 羽介信一郎氏の發見 五、自然の被動 被動五種の比較

第四節 尊稱の動助辭	一七一
------------	-----

「ます」「ます」と「侍り」と「候ふ」との別 「まする」「まし」と「ませ」「ます」の語源 松尾安田 二氏の説

第五節 否定の動助辭	一七五
------------	-----

「ない」「ぬ」「なから」「ないて」「んて」「知らなんだ」「知らんて」「ませんでした」「ない」と「無い」「ない」の語源 「まう」

第六節 完了の動助辭	一八〇
------------	-----

第七節 過去の動助辭……………

一八四

「たつ」け」「だつ」け」

第八節 未然の動助辭(所謂る未來)……………

一八五

未然「う」「よう」「まい」「よう」の發生 未然の七方式 「爲^スまい」は方言 遠州語の「まし」

第九節 當然の動助辭……………

一八九

「んき」「さう」「さう」の語源

第十節 不確の動助辭……………

一九二

不確實「さう」「げな」當然と不確 四國九州の「らう」中部の「ら」遠江の「な」

第十一節 斷定の動助辭……………

一九四

「に」と「及び」「な」「です」……………

一九四

斷定「に」「と」「な」「だ」「です」「て」「と」は靜助辭ではない ニ活とク活との比較 中

止格 方法格 狀態格 一致格 轉活用 「と」の用法 「靜々」とは副詞ではない 「な」の由來

「だ」の由來 「です」の語源 三矢説と安田説 「に」の用法 一致性動詞 事物の一致格 形容の

一致格 動作の一致格 目的の一致格 尊稱の一致格 「ん」の用法 「だ」の假定的用法 「て」の

殊用法 材料又は道具を敘述する「て」原因を敘述する「て」場所を敘述する「て」動作の主體
と場所を敘述する「で」動作の客體と場所を敘述する「て」動作の共同者を敘述する「て」形容
性活用の特徴

「し」及「びけれ」……………

二二三

「し」「けれ」は動助辭である 松下直明の新説 「し」「けれ」の効果 「し」「けれ」「から」「かり」
「けれ」の方言 「けれ」の形式動詞化 接續詞と稱せられる「けれども」

第十二節 特殊の動助辭(接尾辭)……………

二二三

接尾辭 分離動詞

第六章 靜助辭 附、頭助辭……………

二二四

第一節 靜助辭總說……………

二二四

靜助辭の解 尾助辭 靜助辭の五種 格助辭 感動助辭 提示助辭 名助辭 副助辭 特殊靜助
辭 狹義の靜助辭

第二節 格助辭……………

二二七

體言の格助辭……………

二二七

體言の意義

「が」の用法

主語と敘述語 主格 無格 一般格 「が」の特別な用法

「を」の用法

客語と歸著語 客語は動詞以外の語にも懸る 客格 他動格 他動と自動 臨時の他動化 副詞
名詞の他動 「を」の性質 「を」の語源 「を」の無い客語 一般格 他動格の音便

「に」「へ」の用法

依據性 依據格 「に」「へ」の別 「に」「へ」の音便 「に」「へ」の文語の別 方言の依據格 「に」「へ」
「き」の語源 一般格 「に」「へ」の特別な用法 動助辭の「に」「まで」は名助辭副助辭

「から」の用法

出發性の動詞 出發の客語 出發格 名詞へ懸る「から」 理由の「から」 「其の上」の意の「から」
「から」の文語 「から」の語源 「から」の方言

「と」の用法

「と」の用法 與同性の動詞 與同格 臨時の與同性 對抗者と與同者 「と」の用法二 「と」を
承ける名詞 「と」の用法三 接續の「と」 「と」の對用 「と」の用法四 數詞と名詞との接續 名
詞と動詞とを接續する「と」 動助辭の「と」

「より」の用法

形容詞の區分態 形容詞の比較態 名詞へ懸る「より」 「より」の原義 「より」の語源

「の」の用法

「の」の用法 一 連體格 連體語 體言語 連體の意義 「の」の用法二 主體的用法 「の」が主體
を表す場合の四種 「の」の用法三 並列の「の」 副體詞を成す「の」 「の」の語源 方言の「の」が

用言の格助辭

用言と動詞

「て」の用法

方法格 廣義の方法 自然の方法 事件の経路 「て」の完了的意義 完了の主觀的意義 「て」と
動助辭の「て」 「て」の接續 「て」の音便 「て」の約音 文語の「て」と近畿語の「て」 「て」
の音便 動詞の「て」 「て」は「ても」 假説の「て」は「ても」 假説の「て」は「の」意義の辨
「て」は「ても」

「ば」の用法

拘束格 「ば」の接續 「ば」の假定と確定 假定確定の誤解 假定の二種 第一活段と第五活段
確定の二種 偶然確定の三種 單純な偶然 反豫期的 俱存的 「ならば」の二種 「たらば」の二
種 「ば」の用例 確定的意義の發生 「ば」の發生 「ば」の音便及び約音 第一活段と「ば」

「と」の用法.....	二八九
拘束格「は」は理論的「と」は實際時「は」は分説「と」は單説「と」「と」たればの別「と」の接續	
「と」「とも」の用法.....	二九五
「と」「とも」の用法一 放任格「とも」の用法二 放任終止格	
「つて」の用法.....	三〇一
放任格「とて」の音便「たつて」「だつて」「形容詞へつく」「たつて」「うっ」「と」の語源	
「と」「とも」の用法.....	三〇四
因果放任格 偶然放任格	
類似拘束格と類似放任格.....	三〇六
「ては」「ても」「ては」「と」「は」「と」の別「ても」「と」「たつて」の別「が」「と」「けれども」の別「から」	
と「は」の別「を」「と」「を」.....	三一〇
第三節 感動助辭.....	三一〇
疑問 命令 狹義の感動	
「か」の用法 疑問.....	三一〇
疑問の意義 疑問の三種 判斷の疑問の助辭 無遠慮な疑問 遠慮した疑問「か」は體言へ附く	

「や」と「か」 方言の「や」 疑問の利用 反轉離詰誘導 頓悟 假設 離接 不明確 不定「か」	
「と」「かあ」「か」の實質化「か」の不十分終止 並列と見える用法	
「やら」の用法.....	三一九
文語の「やらむ」	
「ろ」「よ」「い」の用法.....	三二〇
四段活系の命令 一二段活系の命令「ろ」「よ」「い」「ろ」「よ」の語源 方言の命令	
「な」の用法.....	三二三
「ぞ」「せ」の用法.....	三二四
指示辭告「ぞ」の語源	
「て」の用法.....	三二五
「は」の用法.....	三二六
婦人語の「は」「はよ」「は」の語源	
「さ」の用法.....	三二九
「よ」「い」の用法.....	三三〇
「や」の用法.....	三三一

第四節 提示助辭

總說

連體 連用

題目の助辭

「は」「も」の一般用法

分説 合説 題目、敘述の二様式 題示的敘述 無題的敘述 平説 單説 題目の三種 既定不可變の概念 未定可變の概念 「は」「が」の別 「は」「も」の接續 「は」の音便

「は」の特別用法

「毎」の意の「は」 判斷の結果を提示する「は」 判斷價值を提示する「は」

「も」の特殊用法

對比 條件を附加する「も」 不明確な他物との對比 重ねた同一語の間に挿む「も」 判斷價值の提示 總括の「も」 例示の「も」

特提の助辭

「しか」「ほか」

「こそ」

「ばかり」「だけ」

「ばかり」「だけ」の語源 「ばかり」の變形及び方言

「まで」

「ぐらゐ」

「でも」 姑息の例示

「なり」「なりと」「なりとも」

「さへ」

「すら」

「など」「なぞ」「なんぞ」「なんか」

「か」「やら」

提示以外の用法

第五節 名助辭

本來の名助辭

尊稱「さん」「さま」の語源 複數と例示「ら」の語源	三六七
提示助辭にもなる名助辭	三六七

第六節 副助辭	三六九
---------	-----

第七節 頭助辭	三七一
---------	-----

一般頭助辭	三七二
-------	-----

「お」「おみ」「こ」の接續 「お」「おみ」「こ」の意義 所有尊稱 單純な所有尊稱 美稱 自體所有
主體を所有者と見る 間接の所有者 直接の所有者 客體を所有者と見る 「お」の誤用

特殊頭助辭	三八六
-------	-----

「さ」「ま」「す」「そ」「と」「だ」「無」「不」「いけ」「もの」分離動詞

第七章 動詞の小分	三九〇
-----------	-----

第一節 象形動詞と模型動詞	三九〇
---------------	-----

總説	三九〇
----	-----

動詞の三種 記號動詞

象形動詞	三九一
------	-----

音査 語査 獲々 副詞と思ふ誤解

模型動詞	三九六
------	-----

生産性動詞 作用と産果 「いふ」「言」「曰」「云」「謂」 非生産性動詞 眞の生産性動詞 非生産性
動詞の生産態 生産性動詞の非生産態 生産の客語 「……………」とは形容詞である 「とて」の音便
「……………」の種々

第二節 形式動詞	四〇四
----------	-----

總説	四〇四
----	-----

實質動詞 形式動詞 形式動詞は動助辭ではない 形式動詞は實質動詞ではない

單純形式動詞	四〇六
--------	-----

體言動詞を補語に取るもの 第二活段を補語に取るもの 接尾辭 分離動詞

修用語を承ける形式動詞	四〇九
-------------	-----

修用語 「来る」「よこす」「居る」「有る」「置く」「見る」「しまふ」「上げる」「下さる」「戴く」
感謝の意 恩に掛ける意 「云ふ」「て」と形式動詞との融合 助動詞

連體語を承ける形式動詞	四一五
-------------	-----

主語客語を承ける形式動詞	四一八
--------------	-----

接頭形式動詞	四二〇
--------	-----

寄生形式動詞	四二一
--------	-----

第八章 詞の格	四二四
---------	-----

第一節 格の總説	四二四
----------	-----

詞の斷句に於ける立場 格の定義 副詞、副體詞、感動詞の格 印歐語の照應格

第二節 名詞の格	四二六
----------	-----

名詞の表現相	四二七
--------	-----

表示態 敘述態 指示態 喚呼態

表示態の格	四二八
-------	-----

名詞表示態の八格 一般格

敘述態、指示態、喚呼態の格	四三一
---------------	-----

第三節 動詞の格	四三二
----------	-----

動詞の九格 一般格

第四節 格の體言化	四三四
-----------	-----

體と用 體用二字の死用 無格を體とし有格を用とする

體言と用言.....四三四

體言動詞.....四三八

主格 出發格 比較格 依據格

連用格の體言化.....四四〇

終止格の體言化.....四四一

連用格の提示.....四四二

第五節 格の含蓄.....四四三

—— 目次終 ——